

戦後 80 年 節目の年を迎えて 戦野に遺骨を探し求める



那覇市医師会 長嶺 信夫
(E-mail : nagamine1128@yahoo.co.jp)

今年は第 2 次世界大戦が終わってから 80 年の節目の年である。

私は 2004 年 5 月、沖縄県南部の激戦地・糸満市米須に沖縄菩提樹苑を開設した後、戦跡を巡りながら沖縄戦にまつわる書籍を読み漁ってきた。

南部戦跡の山野を歩いていると、戦没者の遺骨を発見することがある。遺骨にまつわる書籍の記事が脳裏から離れない。

ひめゆり学徒を引率、南風原陸軍病院壕から撤退し、学徒とともに沖縄本島最南端の荒崎海岸や喜屋武断崖をさまよい歩いた仲宗根政善先生の著書と読売新聞大阪社会部編の記事を紹介したい。

1. 今帰仁出身の幸地哲郎軍医の遺骨

幸地哲郎軍医は岩手医専を卒業後、沖縄戦に従軍し戦死したが、戦死した場所が不明のまま、御両親が息子の最期の様子を訪ね歩いていた。

幸地軍医は南風原陸軍病院第 1 外科に勤務、軍医達と最後まで行動を共にしたが、比嘉診療主任以下 10 名の中、西平守正軍医を残して全員戦死したため、その最期の様子も全く判らなかった。御両親は同郷の仲宗根先生を訪ね、息子の消息を尋ねたものの、仲宗根先生も幸地軍医が別の隊だったので、戦争中一度も会ったことがなく、軍医の消息は皆目わからなかった。

御両親はあきらめきれず、南部の戦野を探し歩いた。すでに 10 数回も探したあと、最後に三和村（現在糸満市）真栄平の野路で百姓に出会い「息子の最期を探して歩いているのですが…」と告げると、百姓は自分の畑に一人の兵隊が埋められているのに気づき、その場に案内した。埋めた跡を掘り起こしてみると、まぎれもなく幸地軍医であった。仲宗根先生は「親の執念から

出て、人事を尽くして探し当てたのである」と記載している。鉄兜は仲宗根先生が書籍を刊行した 1983 年当時幸地家に保管されていた¹⁾。

2. 次に読売新聞大阪社会部編「戦争 13 南の碑」に記載されている記事を紹介する。

首里高女壕にいた外間マサさんは昔の墓跡の小さな壕に派遣され、同地で爆弾の破片で左大腿部を負傷、その後ガス壊疽のため下肢の切断手術を受けた後、兼城村（現在糸満市）武富の壕まで退避したが、同地で亡くなっている。

外間さんを埋葬した星野正子さんは読売新聞の取材に対し「外間さんを武富で埋葬したんだけど、どこだったか終戦後探してもどうしてもわからないんです。爆撃や砲撃ですっかり地形が変わっていて、仕方なくお母さんはマサさんの魂だけ迎えて帰ったの。それからしばらくして、お母さんとお姉さんが何日も同じ夢をみて『畑の溝があるから、そこからちょっと入った所に私居るから早く来てちょうだい』とマサさんが言う夢。行ってみたら、そこにお骨があった」とのこと²⁾。



ひめゆり学徒散華の跡 荒崎海岸に立つ僧侶
遠くに摩文仁の丘が見える 2024 年 1 月 17 日撮影

戦死者を弾痕の穴に埋葬した後、その場所が再度爆撃され、遺体が周囲に飛び散り、跡形もなくなる。このような戦野で行方のわからない肉親の消息と遺骨を探すのは至難の業といえよう。

私は10年前、2015年7月に荒崎海岸の「ひめゆり学徒散華の跡」を訪れた時、背後の岩陰で一本の腓骨の骨を発見したことがある。骨の形態を熟知している医師で、しかも意識的に遺骨を探している人でなければ、白い枯れ枝のように見えた腓骨の骨に気が付かなかっただろう。荒崎海岸はこれまで幾度も収骨作業が行われた場所である。今でも荒崎海岸のアダンの下には多くの遺骨が残っているのではないかと考えている。

沖縄県で32年前の1993年に全国植樹祭が開催された際、山城丘陵で「平和創造の森公園」の造成工事がなされた時、丘陵のアダンの中からおびただしい数の遺骨が発見されたことを私は当時の工事関係者から聞いている。

3. 荒れ果てた戦後の山野

戦後、南部は砲爆撃で地形が変わり、目印の岩や草木も吹き飛び、見る影もなくなっていた。戦後、あちこちで砲弾や艦砲弾で穴があき、中には直径10メートル程の大きさで、クレーターのようないくつもの池になっていた。

終戦直後の小学生の時、当時の小禄村高良小学校から遠足で「ひめゆりの塔」を訪れたことがある。「ひめゆりの塔」の周りには木々はなく、サンゴ礁の石で囲まれたガマが口を開けていた。砲爆撃で戦前に生い茂っていた木々は吹き飛ばされたのである。壕の手前に「ひめゆりの塔」と刻まれた石碑と仲宗根政善先生が詠んだ「いはまくらかたくもあらんやすらかに ねむれとぞいのるまなびのともは」の歌碑が立っていた。素朴な石碑は今もそのまま残っている。

戦時に南方で従軍し、引き上げ船で本土に向かう船上からみた故郷・沖縄は、砲爆撃で草木がない、石灰岩に覆われた真っ白い島であったと聞いたことがある。

米国陸軍省編「沖縄 日米最後の戦闘」に収載されている摩文仁の丘の写真はその模様を端的に表している³⁾。

4. 摩文仁の丘、山城丘陵、荒崎海岸

ひめゆりの塔の南の海側に「魂魄の塔」があり、その背後に山城丘陵がある。ひめゆり学徒や医療班が解散後、弾雨の中を荒崎海岸や喜屋武岬方面へ敗走した丘である。

戦後80年が経ち、丘陵もアダンなど雑木に覆われ、魂魄の塔周辺は慰霊塔や山城陸軍病院本部壕がある以外、静かなたたずまいである。

県民の大多数が戦争を知らない人達になった。荒崎海岸どころか、魂魄の塔さえ知らない県民も多い。残念なことではあるが、『魂魄の塔』を「コンペキの塔」と呼んだ医師さえいる。

私は戦後60年にあたる2005年に、ひめゆり学徒散華の跡の荒崎海岸や山城陸軍病院本部壕、糸洲第二外科壕、伊原第一外科壕に関する記事を書き、翌年の2006年2月に「戦後60年 ひめゆり学徒の足跡を訪ねて」との表題で沖縄県医師会報に掲載した⁴⁾。その後も糸満市真壁の千人壕に関する記事を掲載してもらった⁵⁾。



摩文仁の「平和の礎」崖下での遺骨収集作業に参加して手に握っているのはさび付いた手榴弾 2009年1月25日撮影



終戦直後米軍が撮影した摩文仁の丘陵と荒廃した集落



山城丘陵における土砂採掘現場 2024年2月6日撮影

糸満市山城の丘陵では、20数年前から採石業者によって大掛かりな採石が行われている。日本政府の辺野古基地埋め立ての土砂採掘候補地として沖縄本島の南部地域が指定されたため、山城丘陵が採掘の対象になるのではないかと懸念から、政治問題になっている。現在、ひめゆりの塔側から見えない山城丘陵の海側、すなわち荒崎海岸側は丘陵の大半が掘削され、見る影もない状態になっている。

4年程前から、魂魄の塔近くにある有川中將や部下の将兵が自決した自然壕（ガマ）に隣接した丘陵でも採石が行われていて、白い石灰岩の岩肌が大きく露出し、衆人の目にさらされるようになった。

現在、ひめゆりの塔側の採石工事に関して、採石業者は遺骨が見つかった時は工事を中断し、収骨すると言っているが、戦後80年が経ち、遺骨も風化し一部はすでに土になり、アダンの木々の中で石灰岩と混在し、区別がつかない状態になっている。ましてや、重機で岩山を掘削するような土砂採掘現場で、石灰岩同様に白く風化した遺骨の断片を識別することは至難の業である。

摩文仁の丘や荒崎海岸、喜屋武岬周辺の山野は沖縄戦で亡くなった人達の血に染まった場所である。言い換えると南部戦跡の山野は『戦争で亡くなった戦没者の墓所』といえよう。肉親を戦争で亡くした人達の多くがすでにこの世を去っている。肉親の消息を探し求めて山野を歩いた人達のことを思うと、いたたまれない気持ちになる。沖縄県民は全て遺族である。戦争を知らない人達も先代が体験した戦争の悲劇を後世に伝える義務がある。ウクライナをはじめ世界各地で戦争が続いている。いつになったら平和な日々が訪れるのだろうか。

(2025年4月記)

参考文献

1. 仲宗根政善：石に刻む 沖縄タイムス社 1983;112-115
2. 読売新聞大阪本社社会部編：戦争13 南の碑 1982;100-102
3. 米国陸軍省編 外間正四郎訳：沖縄 日米最後の戦闘 1997;513
4. 長嶺信夫：戦後60年 ひめゆり学徒の足跡を訪ねて 沖縄医報 2006;Vol.42 No.2:167-170
5. 長嶺信夫：馬鹿は死んでも治らない 真壁の千人壕潜入記 沖縄医報 2006 ;Vol .42 No.9:68-70
6. 仲宗根政善：ひめゆりの塔をめぐる人々の手記 角川文庫 1995
7. 金城和彦、小原正雄編：みんなみの巖のはてに 沖縄の遺書 光文社 1959